

2026年度

入 学 試 験 問 題

(A 日 程 午 前)

国 語

注 意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1/6から6/6まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙に受験番号を書きなさい。名前を書いてはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙の指定された解答らん^①に書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
- 5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
- 6 「終了」^{しゅうりょう}の合図で、すぐに筆記用具を置きなさい。
- 7 問題および解答用紙は机の上に置き、持ち帰ってはいけません。

「次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

かあちゃんはため息をついた。

「とうさん。どうしますか」

かあちゃんは、また、同じことをとうちゃんにたずねた。

「うむ……」

とうちゃんだつてすぐに返事ができないのや。

「ともかく良子ちゃん（注かな子の親友）のとこへ、わたし、電話をかけてみます」
かあちゃんは少しいらいらしていった。

「まちなさい」

①とうちゃんが止めた。

「親としてこんなことほっておけないでしょ」

かあちゃんの目は少しきつくなっている。

「かな子に腹を立てているうちは、かな子になにかいうのは、よくないことだよ」

「……」

とうちゃんはかあちゃんをたしなめるようにいった。

「ぼくはねえちゃんに腹立ててるで」

ぼくはいった。

「そうだろうなあ。おまえは傷ついたやろ。わかる気がする」

とうちゃんはぼつぱりいった。

「ともかく夕飯にしようやないか。かな子がどこにいるかわからんというわけじゃないんだから」

かあちゃん是不満そうだったが、とうちゃんのいわれるとおりにした。

さびしい夕飯だった。

このこといつかねえちゃんにいうてやるぞとぼくは思った。

「かあさん。この島にくるとき、かな子に反対されたね。そのときと今と、自分の気持ちがずいぶんちがうのだけれど、どうしてだろ」

食事が終わつてお茶を飲んでいるとき、とうちゃんはそういった。

かあちゃんはじつと、とうちゃんの顔を見た。

「あの子はわれわれの生き方、ここでの生活をわかうとして、あの子なりにずいぶん努めてくれていたように思うのだけど……。かあさんはどう思う」

「そりや……」

②とかあちゃんも口ごもりながらいった。

「かな子の手紙を二度三度と読んでみたが、不思議に腹は立たなかった。わたしたちにさからっているようなのだが、ほんとうは、あの子はわたしたちを本気でわかうとしてくれているのじやないか。そう思ったんだ。どうだろう。かあさん」

かあちゃんはだまっている。だけど、とうちゃんのことをばをじつと考えていることが、かあちゃんの目の色でわかる。

「島の生活が自分の意志でないことがくやしいって、^③こういういわれ方はなんともこたえるね。あの子はもう自立しかけているんだよ。かあさん」

かあちゃんはほつとため息をついた。はじめの困りはてていたときのため息と、少しちがつているような気がした。

「ぼくはねえちゃんを許してやれへんで」

ぼくはおこったふりをしていつてやった。

かあちゃんがぼくを見て、「A」。

「お茶をかえましょうか」

とかあちゃんはいった。いつものようにやさしいかあちゃんだった。

コロコロコロとどこかで虫が鳴いた。

「タカユキ。あんた、明日、ねえちゃんの着替えをもつていつてやってくれる？」

「いややで」

ぼくはイジワルをした。

「ぼうず、なにをいうとるか」

とうちゃんがぼくの頭をぐいとついた。

とうちゃんとかあちゃんが、電話でねえちゃんと「B」「ぼくは安心してねどこに入った。

（中略）

ぼくは良子ちゃんの家のベルを押した。じき良子ちゃんが顔を出した。

「あら。タカぼう」

（なにが、あら、タカぼうや）

ぼくはどさんと、ねえちゃんの赤いポストンバッグを玄関において、知らん顔で背を向けてやった。

「なんやの、タカぼう。どうしたの」

（どうしたのやて。あほか）

「タカぼう。あがんなさいよ」

「ねえちゃんにいうといて」

ぼくは後ろを向いたままいった。

「もうねえちゃんとゼツコウするよつてそういうといて」

「あら。タカぼうおこつてんの」

ぼくがだまって行きかけたら、良子ちゃんをあわてて、ぼくの肩をつかんだ。

「離せ。チカン」

「まあ。チカンやて。ま、なんでもいいけど、ちょっとまちなさいよ」

良子ちゃんはぼくをつかんで離さない。

「かな子ちゃあーん」

と、ねえちゃんを大声で呼んだ。

「ま、すわんなさいよ」

と良子ちゃんはいった。

「タカぼうがかな子ちゃんのミカタになってあげなくてどうするの」

（ずうずうしいな。勝手なこというて。これやから女は嫌いなんや）

「タカぼうに相談しなかったのは悪いけど……」

「……」

ぼくは突っ立ったままやった。

「タカぼう、すわって……」

ねえちゃんはいった。

「ぼくは裏切り者と口をきくのんいややねん」

「冷たいナ」

「冷たいのはだれや。また話しよういうたんだれや。ねえちゃんはたった一人の弟を裏切ったんや」

「ごめん。タカぼうにそういわれるとねえちゃんつらい」

ねえちゃんはしよんぼりしている。

いいすぎたかなとぼくは思った。

「話だけいて。それでもタカぼうがねえちゃんを許さへんというのがないけど……」

ぼくはすわってあぐらをかいた。

「ほな、話せ」

④なぜか良子ちゃんがくくつと小さく笑った。

「タカぼう。あんた、はじめ島へいくのを反対したやろ。その気持ち、今はどうなってるの」

「……」

ぼくはちよつとつまつた。

「はじめと今とはちがうわい」

「どうちがうの」

ねえちゃんに問いつめられて、ぼくはやけくそみたいにくたえた。

「ぼくは島のくらしが好きなんや」

「ねえちゃんもや」

⑤えつとぼくはおどろいた。

（ほな、なんで家出したんや）

「な、タカぼう。そのとこわかって。ねえちゃんも島でくらしているうちに島の生活がいいなって思うようになったし、とうさんやかあさんがどうしてそうしようと思ったのかも、少しずつわかるようになってきたのや。だけど、そうしようとしたのは、あくまで、とうさんとかあさんであつて、わたしらは、とうさんとかあさんの生き方なつとくさせられただけのことやろ」

（また、ごちやごちや理屈をこね出しよつた）

「それやつたら、自分の生き方というもんがどこにあるの。ね、タカぼう」

「あのね、タカぼう」

良子ちゃんがよこから口を出した。

「わたしらも父のテンキンにしたがつて東京に行くところやつたんやけど、ねえちゃんと二人で抵抗したんよ。どんな生きものでもやがて親から独立するもんやということはタカぼうもわかるでしょ。自分の意志で生きるってことはとても大事なことなんよ」

⑥「ほな、ぼくは自分の意志で生きてえへんのか」

ぼくは腹が立ってきた。

「だれも、そんなこというてないやないの。かな子ちゃんが、かな子ちゃんのおとうさんやおかあさんにたださからっているだけやつたら、わたしらかな子ちゃんを応援したりせえへんよ。かな子ちゃんは島の生活を自分の意志で自分のものにしたいたい気持ちがあるの。そのために少し時間がほしいだけなのよ。タカぼう、そのとこをわかってあげなさいよ」

なんでそんなややこしいまわりくどい生き方をするのかぼくには少しもわからへん。だけど、ねえちゃんはぼくよりも大人に近い。いつか岸本先生が青春は悩みや、青春はフクザツやというてたから、ねえちゃんも今、そんな気持ちかもしれん。

人間はややこしいな。ぼくはねえちゃんとちがつて、なるべく簡単に生きてやる。

（ねえちゃんはそのでいいかしらんけど、とうちゃんやかあちゃんがさびしい思いをしているのはどうしてくれんねん）

そういいかけたけど、ぼくは口をつぐんだ。それをいったらねえちゃんがかわいそうやと思った。

ぼくがだまっていたので、ねえちゃんはいった。

「タカぼう。わかってくれた？」

「わからん。けど、ねえちゃんを嫌いになるのをもう少しまってやる」

「もおう……」

⑦と、ねえちゃんはすねたようにいった。けど、目が笑っていた。

問一 ――線部1～5のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〰線部X「たしなめる」、Y「ずうずうしい」、Z「つぐんだ」の本文での意味として適当なものを次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

X たしなめる		Y ずうずうしい	
ア	よくない点を正す	ア	見境がない
イ	説得する	イ	うっとうしい
ウ	理解を深める	ウ	態度が大きい
エ	言いくるめる	エ	あつかましい

Z つぐんだ	
ア	とがらせた
イ	閉じた
ウ	ゆがませた
エ	すぼめた

問三 ――線部①「とうちゃんが止めた」とありますが、「とうちゃん」がそのようにした理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 自分が返事をしなかったことで、電話をするかあちゃんにすべての責任がかけられると考えたから。

イ 感情的なかあちゃんの今の状態では、かな子の気持ちを聞いてあげることができないと考えたから。

ウ 腹を立てている多くの気持ちをなだめるためには、かあちゃんを注意する必要があると考えたから。

エ かあちゃんかな子に話をするにしても、電話をする以外に方法があるのでないかと考えたから。

問四 ――線部②「かあちゃんも口ごもりながらいった」とありますが、このときの「かあちゃん」の様子を説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア とうちゃんの意見にむりやり同調させられたことに怒りつつも、文句を言えないでいる。

イ とうちゃんの急な問いかけに考えがまとまらず、いい答えを出すことができないでいる。

ウ とうちゃんの話すかな子の変化に賛同できる部分があり、うまく返事ができないでいる。

エ とうちゃんの考えを理解したいと思いつつも、かな子の身勝手な行動を許せないでいる。

問五 ――線部③「こういういわれ方はなんともこたえるね」とありますが、このときの「とうちゃん」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 島での生活をさせているのは自分たちのわがままで、それをかな子に非難されると何も言い返せないため、つらい気持ちになっている。

イ 島での生活にかな子がなじんだのは自分たちの思いをくんでのことと考えていたが、その考えがくつがえされたため、切なくなっている。

ウ 島での生活に対するかな子の考え方に変化が見られたものの、自分たちにはどうすることもできないため、もどかしい思いをいだいている。

エ 島での生活が家族にとってつらいものでしかなかったと認めることは自分を否定することになり、今さら難しいため、危機感をつのらせている。

問六 〔A ①・B ①〕に入ることばとして最も適当なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

A	ア あきれてしまったようや	イ ちよっとほえんだようや
ウ	う なにか悲しかったようや	エ かなりいらついたようや
B	ア 声高に言い合っている様子を見て	イ 和解していることが分かって
ウ	ウ 心を通じ合わせているのを知って	エ 静かに話している声をきいて

問七 ――線部④「なぜか良子ちゃんがよくくつと小さく笑った」とありますが、このときの「良子」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 申し訳なさそうにしている姉と、いやがっていたはずの話を聞こうとする弟の様子を見て、あれこれ言いつつもお互いのことを思う関係を感じ、ほほえましく思っている。

イ えらそうな口調で話している弟と、やさしく聞いてあげている姉の様子を見て、自分と違って年の離れた姉弟がいることに家族のあたたかみを感じ、うらやましく思っている。

ウ 姉を言い負かそうとする弟と、自分の意見を曲げようとしなない姉の様子を見て、一緒にいたときにも感じていた二人の仲の悪さをあらためて感じ、なさけなく思っている。

エ 同情をかうように話をする姉と、同情したかのように見せかける弟の様子を見て、どうにかして自分の意見を通そうとする二人に見苦しさを感じ、こっけいに思っている。

問八 ――線部⑤「えつとぼくはおどろいた」とありますが、その理由を三十字以内で説明しなさい。(、。。「」は字数に数えます。)

問九 ――線部⑥「ぼくは腹が立ってきた」とありますが、その理由を説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 家出の理由として話した内容があいまいで、家族に許してもらえないようなものでなかったから。

イ 家族の言ったとおりの家出の理由であったが、子どもの自分が理解するには難しかったから。

ウ だれにも相談せずに家出したのはかな子なのに、それを自分のせいにされたと感じたから。

エ 家出をした理由にいろいろ説明をつけ出したうえに、自分の生き方をけなされた気がしたから。

問十 ――線部⑦「だけど、目が笑っていた」とありますが、この場面を説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 弟との関係を見直すことができてすがすがしさを感じている。
イ 自分の気持ち但至少でも伝わったことでうれしくなっている。
ウ 自分の理解者が家族に増えていくことを心強く思っている。
エ お互いの考え方を確認し合うことができて満足している。

問十一 この作品について生徒AとCが話し合っています。()にあてはまる適当なことを、(a) (c) は本文から () 内に指定された字数で書きぬき、(d) は十字以内で考えて答えなさい。(、 。 「」は字数に数えます。)

生徒A 「ぼく」は、姉の生き方が分からないといっているね。

生徒B だから、自分は (a 十字以内) に生きたいといっているんじゃないかな。

生徒C なぜそう思ったのかな。

生徒A 自分よりも大人に近い姉が、(b 二字) をかかえているのを見たからだよ。

生徒B それで、「ぼく」は、(c 十字以内) と考えたんだね。

生徒C では家族のことはどう思っているんだろう。家出をした後、さびしい夕飯になったことを伝えようとたくらんでいたよね。

生徒A でも結局、伝えられなかったんだよね。

生徒B そう。姉に伝えることで、(d 十字以内) ことが分かるのがかわいそうだと思ったんだよ。

生徒C 乱暴な言い方とは対照的に、家族のことを思いやる「ぼく」の優しい性格が表れているね。

問十二 本文の持ちようを説明したものとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 会話に方言や登場人物に合った言葉づかいを入れることで、地方の生きづらさを表している。

イ 観察力に富む主人公の視点で描かれることで、登場人物の心情が表情や仕草で伝えられている。

ウ 登場人物の気持ちの変化に合った風景を入れることで、現実味のある場面が作りだされている。

エ 登場人物の会話が進むたびに視点を変えることで、主人公の心情によりそえるようにしている。

オ 登場人物それぞれの性格をていねいに説明することで、人物像を的確にうかがあがらせている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

住空間をきれいにするには、できるだけ空間から物をなくすことが肝要ではないだろうか。ものを所有することが豊かであると、僕らはいつの間にか考えるようになった。

高度成長の頃の三種の神器は、テレビ、冷蔵庫、洗濯機、その次は、自動車とルームクラーとカラーテレビ。戦後の飢餓状態を経た日本人は、「A」、ものを率先して所有することで、豊かさや充足感を噛み締めるようになっていたのかもしれない。しかし、考えてみると、快適さとは、溢れかえるほどのものに囲まれていることではない。「B」、ものを最小限に始末した方が快適なのである。何もないという簡潔さこそ、高い精神性や豊かなイマジネーションを育む温床であると、日本人はその歴史を通して、達観したはずである。

慈照寺の同仁齋にしても、桂の離宮にしても、空っぽだから清々しいのであって、ごちゃごちゃと雑貨やら用度品やらで溢れているとしたなら、目も当てられない。セレンを経た居住空間は、簡素にしつらえられ、実際にこの空間に居る時も、ものを少なくすっきりと用いていたはずである。用のないものは、どんなに立派でも蔵や納戸に収納し、実際に使う時だけ取り出してくる。それが、^①日本的暮らしの作法であったはずだ。

しかしながら、今の日本の人々の住宅は、仮に天井をはがして俯瞰するならば、どこの世帯もおおむね夥しいもので溢れかえっているのではないかと想像される。率先して所有へと突き進んだ結果である。かつて腹ぺこに泣かされた欲深ウサギは両方の手にビスケットを持っていないと不安なのである。しかし冷静に判断するなら、両方の手に何も持っていない方が、生きていく上では便利である。両手が自由なら、それを振って挨拶もできるし、時には花を活けることもできよう。^②両の手がビスケットでいつも塞がれていては、そういうわけにもいかない。

ピーター・メンツェルという写真家の作品に『地球家族』と題された写真集がある。これは多様な文化圏の家族を撮影したものだ。それぞれの家族は、全ての家財道具を家の前に持ち出して並べ、家を背景にして写真に収まっている。どのくらいの国や文化、家族の写真が収められていたかは正確に記憶していないけれども、鮮明に覚えているのは、日本人の家財道具が、^③グンを抜いて多かったことである。日本人は、「C」いつの間にこんなにたくさんの道具に囲まれて暮らしはじめたかと、啞然とした気持ちでそれを眺めた。無駄と言いつけることはできないまでも、なくてもよいものたちを、「D」ここまで細かく取り揃えたものだときれる。別の言い方をするならば、ものの生産と消費の不毛な結末を静かに指摘しているようなその写真は、僕らがどこかで道を間違えてしまったことを暗示しているようであった。

ものにはそのひとつひとつに生産の過程があり、^{*}マーケティングのプロセスがある。石油や鉄鉱石のような資源の採掘に始まる遠大なものづくりの端緒に遡って、ものは計画され、修正され、実施されて世に人々をなしてくる。さらに広告や 프로모ーションが流通の後押しを受けて、それらは人々の暮らしのそれぞれの場所にたどり着く。そこにどれほどのエネルギーが消費されることだろう。その大半が、なくてもいいような、^{*}雑駁とした物品であるとしたらどうか。資源も、創造も、輸送も、電波も、チラシも、コマーシャルも、それらの大半が、暮らしに濁りを与えるだけの結果しかもたらしていないとするならば、これほど虚しいことはない。

僕らはいっしょか、もので溢れる日本というものを、度を超えて許容してしまったかもしれない。世界第二位であったGDPを、目に見えない誇りとして頭の中にソウチャクしてしまった結果か、あるいは、戦後の物資の乏しい時代に経験したものへの渴望がどこかで幸福を測る感覚の目盛りを狂わせてしまったのかもしれない。秋葉原にしてもブランドショップにしても、過剰なる製品供給の情景は、ものへの切実な渴望をひとたび経験した目で見えるならば、確かに頼もしい勢いに見えるだろう。だから、いつの間にか日本人はものを過剰

に買い込み、その異常なる量に鈍感になってしまった。

しかし、そろそろ僕らはものを捨ててはいけない。捨てることのみを「もつたいたい」と考えてはいけない。捨てられるものの風情に感情移入して「もつたいたい」と感じる心持ちにはもちろん共感できる。しかし膨大な無駄を排出した結果の、廃棄の局面でのみ機能させるのだとしたら、その「もつたいたい」はやや鈍感に過ぎるかもしれない。廃棄する時では遅いのだ。もしそういう心情を働かせるなら、まずは何かを大量に生産する時に感じた方がいいし、さもないければそれを購入する時に考えた方がいい。もつたいたいのは、捨てることではなく、廃棄を運命づけられた不毛なる生産が意図され、次々と実行に移されることではないか。

だから大量生産という状況についてももう少しヒョウ的になった方がいい。無闇に生産量を誇ってはいけないのだ。大量生産・大量消費を加速させてきたのは、企業のエゴイスティックな成長意欲だけではない。所有の果てを想像できない消費者のイメージ・シンの脆弱さもそれに加担している。ものは売れてもいいが、それは世界を心地よくしていくことが前提であり、人はそのためにものを欲するのが自然である。さして必要でもないものを溜め込むことは決して快適ではないし心地よくもない。

⑤ 良質な旅館に泊まると、感受性の感度が数ランク上がったように感じる。それは空間への気配りが行き届いているために安心して身も心も解放できるからである。しつらいや調度の基本はものを少なく配することである。何もない簡素な空間にあつてこそ、畳の目の才りなす面の美しさに目が向き、壁の漆喰の風情にそえられる。床に活けられた花や花器に目が向き、料理が盛りつけられた器の美しさを堪能できる。そして庭に満ちている自然に素直に意識が開いていくのである。ホテルにしても同様。簡潔に極まった環境であるからこそ一枚のタオルの素材に気を通わせることができ、バスローブの柔らかさを楽しむ肌の繊細さが呼び起こされてくるのである。これは一般の住まいにも当てはまる。現在の住まいにあるものを最小限に絞って、不要なものを処分しきれば、住空間は確実に快適になる。試しに夥しい物品のほとんどを取り除いてみればいい。おそらくは予想外に美しい空間が出現するはずだ。

⑥ 無駄なものを捨てて暮らしを簡潔にするというのは、家具や調度、生活用具を味わうための背景をつくるということである。芸術作品でなくとも、あらゆる道具には相応の美しさがある。何の変哲もないグラスでも、しかるべき氷を入れてウイスキーを注げば、めくるめく琥珀色がそこに現れる。霜の付いたグラスを優雅な紙敷の上にぴしりと置ける片付いたテーブルがひとつあれば、グラスは途端に魅力を増す。逆に、漆器が艶やかな漆黒をたたえて、陰影を礼讃する準備ができていたとしても、リモコンが散乱していたり、ものが溢れかえっているダイニングではその風情を味わうことは難しい。

白木のカウンターに敷かれた一枚の白い紙や、漆の盆の上にことりと置かれた青磁の小鉢、塗り碗の蓋を開けた瞬間に香りたつ出し汁のにおいに、ああこの国に生まれてよかったと思う刹那がある。そんな高踏な緊張など日々の暮らしに持ち込みたくはないと言われるかもしれない。緊張ではなくゆるみや開放感こそ、心地よさに繋がるのだという考え方も当然あるだろう。家は休息の場でもあるのだ。しかし、だらしなさへの無制限の許容がリラクゼーションにつながるという考えは、ある種の墮落をはらんではないまいか。ものを用いる時に、そこに潜在する美を発揮させられる空間や背景がわずかにあるだけで、暮らしの喜びは必ず生まれてくる。そこに人は充足を実感してきたはずである。

伝統的な工芸品を活性化するために、様々な試みが講じられている。たとえば、現在の生活様式にあつたデザインの導入であるとか、新しい用い方の提案とかである。自分もそんな活動に加わつたこともある。そういう時に痛切に思うのは、漆器にしても陶磁器にしても、問題の本質はいかに魅力的なものを生み出すかではなく、それらを魅力的に味わう暮らしをいかに再興できるかである。漆器が売れないのは漆器の人氣が失われたためではない。今日でも素晴らしい漆器を見れば人々は感動する。しかし、それを味わい楽しむ暮らしの余白がどんどんと失われているのである。

伝統工芸品に限らず、現代のプロダクツも同様である。豪華さや所有の多寡ではなく、利用の深度が大事なのだ。よりよく使い込む場所がないと、ものは成就しないし、ものに託された暮らしの豊かさも成就しない。だから僕たちは今、未来に向けて住まいのかたちを変えていかなくはならない。育つものはかたちを変えろ。「家」も同様である。

ものを捨てるのはその一歩である。「もつたいたい」をより前向きに発展させる意味で「捨てる」のである。どうでもいい家財道具を世界一たくさん所有している国の人から脱皮して、簡潔さを背景にものの素敵さを日常空間の中で開花させることのできる繊細な感受性をたずさえた国の人に立ち返らなくてはいけない。

⑧ 持つよりもなくすこと。そこに住まいのかたちを作り直していくヒントがある。何もないテーブルの上に箸置きを配する。そこに箸がぴしりと決まったら、暮らしはすでに豊かなのである。

（原研哉『日本のデザイナー―美意識がつくる未来―』）

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| * 飢餓…うえること。 | * 温床…あるものが生まれ育ちやすい環境。 |
| * 達観…全体を見通すこと。 | * 慈照寺の同仁斎…銀閣寺の茶室。 |
| * マーケティング…商品を売る活動。 | * プロモーション…宣伝。 |
| * 雑駁…まとまりがないこと。 | * 渴望…しきりに望むこと。 |
| * エゴイスティック…利己的、自分本位。 | * 脆弱…もろく、弱いこと。 |
| * 堪能…気のすむようにすること。 | * 艶やかな…濃厚な美しさ。 |
| * 陰影を礼賛する…かげをほめたたえること。 | * 刹那…瞬間。 |
| * 高踏な…気高いこと。 | * リラクゼーション…息抜き、休息。 |
| * プロダクツ…商品。 | * 多寡…数量や程度の大小。 |

問一 ――線部1ゝ5のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 「A」ゝ「D」にあてはまることばとして適当なものを次のAゝオから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

(同じ記号は二度使えません。)

ア むしろ イ よくぞ ウ いったい エ いつしか オ まさか

問三 ――線部①「日本的な暮らしの作法」とありますが、それはどのようにすることですか。本文のことばを使って三十字以内で答えなさい。(、。。「」は字数に数えます。)

問四 ――線部②「両の手がビスケットでいつも塞がれていては、そういうわけにもいかない」とありますが、これを説明したものとして最も適当なものを次のAゝエから選び、記号で答えなさい。

ア ものに満たされていると、身軽に対応することができなくなること。

イ ものに満たされていないと、安心して行動することができなくなること。

ウ ものを持っていないと、礼儀を身につけることができなくなること。

エ ものをたくさん持っているのと、自分の身を守ることができなくなること。

問五 ――線部③「僕らがどこかで道を間違えてしまったことを暗示しているようであった」とありますが、「暗示」された内容の説明として最も適当なものを次のAゝエから選び、記号で答えなさい。

ア 多様な文化圏の国々が一つの家族になるのは難しいことを示している。

イ 日本人の幸福を測る感覚がおかしくなってしまうことを示している。

ウ なくてもよいものを取り揃える文化は滅んでしまうことを示している。

エ 家財道具はどの国でもなくてはならないものであることを示している。

問六 ――線部④「捨てることのみを『もったいない』と考えてはいけない」とありますが、その理由として最も適当なものを次のAゝエから選び、記号で答えなさい。

ア 捨てることだけに意識を集中していると、廃棄の後に膨大な無駄があるということに鈍感になってしまうから。

イ 捨てることだけに不満を言うべきではなく、必要としないものを大量に保存する状況を問題とするべきだから。

ウ 捨てることだけに不快感を感じてしまうのは、戦後の切実な物不足の記憶によるもので仕方のないことだから。

エ 捨てることだけに問題があるのではなく、廃棄される可能性を知りながら生産することにも問題があるから。

問七 ――線部⑤「良質な旅館に泊まると、感受性の感覚が数ランク上がったように感じる」とありますが、そのことを本文ではどのように述べていますか。最も適当なものを次のAゝエから選び、記号で答えなさい。

ア ものを少なく配することで質素で安価な空間を作りあげると、身も心も解放できる。

イ 空間への気配りを感じて心が解放されると、繊細な感覚を呼び起こすことができる。

ウ 美しく整えられた空間が少しでも乱れていると、風情を味わうことはできない。

エ 開放感が心地よさにつながらないと、美しい空間を出現させることができない。

問八 ――線部⑥「無駄なものを捨てて暮らしを簡潔にする」ということは、…背景をつくるということである」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「生活用品を味わうための背景をつくる」ために必要なものは何だと筆者は考えていますか。最も適当なものを次のAゝオから選び、記号で答えなさい。

ア 緊張 イ ゆるみ ウ 開放感 エ 休息 オ だらしなさ

(2) 「背景」が作られることで、人はどのように感じてきたと述べられていますか。解答らんに続くように、本文のことばを使って、二十五字以内で答えなさい。(、。。「」は字数に数えます。)

問九 ――線部⑦「それらを魅力的に味わう暮らしをいかに再興できるかである」とありますが、「再興」するとはどうすることですか。最も適当なものを次のAゝエから選び、記号で答えなさい。

ア 伝統的な工芸品の風情を味わう休息の場を設けること。

イ 伝統的な工芸品の魅力を発揮する素材を作り出すこと。

ウ 伝統的な工芸品を味わい楽しむゆとりを取り戻すこと。

エ 伝統的な工芸品を活性化するための活動に加わること。

問十 ――線部⑧「住まいのかたちを作り直していくヒントがある」とありますが、このことを次のように説明しました。()にあてはまる適当なことばを本文から探し、(a)・(b)は五字以内、(c)は十字以内で書きぬきなさい。

(、。。「」は字数に数えます。)

ものを使い込み、(a)を深めることで、暮らしの豊かさは成就する。そのために、「捨てる」ことで、(b)を背景にもとの素敵さを味わうことのできる(c)を持った姿に戻るよう、住まいのかたちを作り直していかなければならない。

問十一 この文章に書かれている内容として正しいものを次のAゝエから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高度成長の頃に三種の神器を所有することで、日本人は高い精神性を育んできた。

イ マーケティングのプロセスを経た商品の大半は、生活を豊かにしてきた物品である。

ウ 企業の成長意欲に加え、消費者の想像力の弱さも大量生産・大量消費を加速させた。

エ あらゆる道具が持っている美しさを、一般の家庭で引き出すのには限界がある。

問一	1	イジワル
	2	ゼツコウ
	3	ミカタ
	4	テンキン
	5	フクザツ

問二 X

Y

Z

問三

問四

問五

問六 A

B

問七

問八

問九

問十

問十一 a

問十二

b

c

d

二

問一

1	センレン
2	グン
3	ソウチャク
4	ヒヒヨウ
5	オ

的

りなす

問二 A

B

C

D

問三

問四

問五

問六

問七

問八

(1)

(2) 美を發揮する背景があることで

問九

問十 a

b

c

問十一

受 験 番 号

問一	1	イジワル
	2	ゼツコウ
	3	ミカタ
	4	テンキン
	5	フクザツ

意地悪	絶交	味(身)方	転勤	複雑
-----	----	-------	----	----

問二	X	ア	Y	エ	Z	イ	問三	イ	問四	ウ
----	---	---	---	---	---	---	----	---	----	---

問五	ウ	問六	A	イ	B	エ	問七	ア
----	---	----	---	---	---	---	----	---

問八			問九			問十		
と	し	ね	エ			イ		
思	が	え						
っ	嫌	ち						
て	い	ゃ						
い	で	ん						
た	家	は						
か	出	島						
ら	を	の						
。	し	く						
29字	た	ら						

問十一	a	な	る	べ	く	簡	単	問十二	イ
-----	---	---	---	---	---	---	---	-----	---

b	悩	み
---	---	---

d	c
家	人
族	間
を	は
悲	や
し	や
ま	こ
せ	し
て	い
い	(な)
る	

二	1	センレン	2	グン	3	ソウチャク	4	ヒヒヨウ	5	オ
問一	洗練	群	装着	批評	的	織	り	な	す	

問二	A	エ	B	ア	C	ウ	D	イ
----	---	---	---	---	---	---	---	---

問三			問四			問五		
取	、	用	エ	ア		イ	イ	
り	実	の						
出	際	な						
し	に	い						
て	使	も						
く	う	の						
る	と	は						
こ	き	収						
と	だ	納						
。	け	し						

問八	(1)	ア	(2)	美を發揮する背景があることで	問九	ウ
			を	び		
			実	が		
			感	必		
			し	ず		
			て	生		
			き	ま	暮	
			た	れ	ら	
			。	、	し	
				充	の	
				足	喜	

問十	a	利	用	の	深	度
----	---	---	---	---	---	---

b	簡	潔	さ
---	---	---	---

c	織	細	な	感	受	性
---	---	---	---	---	---	---

問十一	ウ
-----	---

受 験 番 号